

# 郷土

第 8 号

平成10年3月31日

編集・発行 / 宮本常一記念事業策定審議会  
東 和 町



和佐共同墓地の建武二年（二三三）宝篋印塔

この宝篋印塔は現位置に半ば埋もれるなど散乱していた。文化財調査のために掘り出し、基礎の輪郭の左右に「建武二年」「六月十八日」の銘文を発見した。山口県下の在銘宝篋印塔では最も古い優品である。塔身の四面は四方仏を彫るが、この塔は珍しく成仏祈願の光明真言を彫っている。南北朝の戦乱期という時代を反映しているのであろう。

現高は八九、九センチで、一番上の相輪が失われているが、揃えば約一五〇センチの五尺塔として造られている。良質の花崗岩を使い、各部の様式が洗練されており、畿内を中心に活躍した中央の石工が彫ったものである。

東和町で数少ない中世資料であると同時に、当時から海を通じて中央と交流のあったことをしめす貴重な文化財といえる。



## 郷土の土とは何か？

## 地名半田という土地の四代にわたる歴史



記念事業専門部会長

米安 晟

## 郷土

『郷土大学』は宮本先生が名付けられた名称です。この郷土という言葉には、いろいろの意味が含まれています。

郷土の「土」とは土地を示す土なのか、土壌を示す土なのか、これらを総合した宅地とか農地（畑とか水田）とか、土地利用を含めてのものか、いろいろ考えられます。また『郷土』となると、これは郷里、故郷、ふるさと、古里、ふる里などの言葉でも示されています。何故このようなことをはじめに書いたかといえますと、これは山口県大島郡東和町大字西方にある半田（はんだ）という、土地に展開された、四代にわたる物語りであるからで、形は土地に変わりありません。

土地は水田や畑として利用するとき、土・土壌が問題となります。これから書くことは、半田に展開された人

と「土」と「水」と「石」にまつわる実話なのです。

## 現在の半田（はんだ）

半田という地名の土地は、下田八幡宮の森のすぐ上（南側）にあり、八幡宮の西側を通り、西方（にしがた）に通じ、白木山に登る道の両側にある約二十アール（二反歩、六百坪）の土地です。

## 道の東側の畑

現在は宮本常一先生の次男である光さんが畑として利用し、道の東側にはビニールハウスが建っていて、その中にはサツマイモの苗床があり、一万本以上の苗生産が行われ、大島郡のサツマイモ作りに貢献しています。サツマイモは苗の良し悪しで、芋の数や良否も決まります。

光さんの売る苗は自分の家で植える苗と同じ苗ですから、たいへん生産力の高い良い苗です。

ひと昔前のさつまいもの苗床は、露地で行われ、簡単な苗床であり、生産も上がりませんでした。現在のハウスによる育苗は暖房機も使わず、トンネ

ル被覆による作り方で、省エネ生産という時代にあつたものです。また生産費を節約するために、前年の芋蔓を残しておき、これから出る芽を苗に育てるという、これまでにない方法も行われています。

## 道の西側の畑

道の西側はさつまいもと大根の生産用の畑です。さつまいもの早出しは九月に出荷され、この後に春出しの大根が作られ、土地の有効利用が図られています。ここも元はたんぼでしたが、埋め立てられて現在は畑となつたのです。

## 半田の土地利用経過

この土地は太平洋戦争終戦直後は、米安晟が水田として作っていました。米安晟が水田として作っていましたが、さかのぼると宮本常一先生の父善十郎さん、宮本先生、私、さらに宮本光さん四代に深い関係があるのです。

郷土の一枚の土地、水田・畑・土壌での、深い一つの歴史があるのです。むしろそこに投ぜられた労力・資材と生産力、また学者宮本先生を生み出したとも思われる、見えない歴史の流れが秘められています。

今になってみると、書いて置かないと忘れてしまいそうなので、記録しておきます。

## 宮本先生から直接聞いた話

―百姓仕事のきつさから解放されるために、学者になったとも云える

## 宮本常一先生

半田は米安家の土地ですが、米安は「米安白木堂」という菓子屋を営み、宮本とは親戚でもあります。（宮本先生の祖母は私の家から嫁いでいます。）

このようなことから宮本先生の父善十郎さんに田を作ってもらっていたのだと思います。

現在は米安晟、米安綾子名義の土地になっており、宮本光さんが正式に小作契約をして作っているのも、昔にさかのぼると、宮本先生の父であり、また光さんの祖父である善十郎さんが、私の家から今と同じように、小作で水田として稲を作っていたのです。

昭和二十一年というと、大東亜戦争終戦の翌年ですが、軍人であつた私は解任され、長崎の家にいて、百姓をしていました。

何故このようなことを、言い出したかと言いますと、この水田で仕事をしていた私に、帰郷して通りかかった宮本先生が、こんな話をしてくれたのです。

「ここで小さいときに父の手伝いをしていたが、あまりにも仕事がつく苦しいので、百姓をするより学者にな

ろうと思った」  
と話されたのです。

### 暗渠排水とは？

宮本先生の父善十郎さんは篤農家であり、農業で生産をあげるために、数々のことをされていますが、その一つに水田の暗渠（あんきょ）排水があります。

良質の米や麦をたくさん収穫するために、水田として使うときは水が溜まり、裏作で麦を作るときは排水が良いよう、土地改良を行う方法があり、それが暗渠排水という難仕事です。

排水の悪い湿田を改良するために、普通は木の枝や藁や土管をいれて、水排けがよいようにするのですが、島の手でもあり、木の枝や藁より、当時は浦の浜に出れば、石ころはいくらでもあり、これを集めて粗朶の代わりに入れることを、考えつかれ実行されたのでしよう。半田の田に暗渠排水が施されていることを、先生の話で初めて知りました。

### 暗渠排水工事のつらさ

私は東京農業大学三鷹農場の湿田で暗渠排水を実施した経験があるので、なおさらその苦労がわかるのです。まず五〜七メートル間隔に幅五十センチ・深さ一メートル五十センチの深い溝を掘るのです。湿田ですからどぶ田のため、掘った翌日に行ってみると、

その溝がつぶれていて、また掘り直すという泥だらけの仕事を繰り返し、次第に乾くようになるのです。これに土管を入れ粗朶を詰め込むのです。この土管と粗朶の代わりに石ころを使うことを、善十郎さんは考えつき実行されたのだと思います。私は銀杏の木の枝を切り落としてこれを使いしましたが、大量にいるため、用意するのにたいへんだった記憶があります。

### 寒風吹きすさぶ冬の仕事

暗渠排水の仕事は米を作らない冬の仕事です。石ころを集めて運ぶのも、北風の吹く海辺の仕事で、手はかじかみ、あかぎれの切れる仕事で、歌の文句ではありませんが、

さぞやつらから冷たから

ということ、こんなつらい仕事をする百姓になるよりは学者になろうと思ったのでしよう。

当時の大島郡は長男が後を継ぎ、次男以下はよそに出るのが当たり前のことでした。宮本先生は長男ですし、当然百姓として後を継ぐ立場でした。もともと体はそれほど頑丈ではありませんから、なおさらつらかったと思います。大阪にいた叔父の音五郎さんの薦めで、都会にでて勉強させてはということ、学者になる道が開けるのですが、この暗渠排水の作業のつらさは、頭にこびりついていて、思い出深い水田で仕事をしている私に、本心を話されたのだと思います。



百姓を志した私に百姓は大変だよと、わざと話されたと思います。

## 半田と米安晟

### 一、麦の多収穫

この土地は宮本善十郎さんのおかげで、戦後私が農業をやっているときは米も麦も良く出来ました。それに宮本先生の紹介で丸木長雄先生を知り、そこで学んだ麦の移植栽培を半田の田の裏作で行い、一反四俵とれるのが普通のところを、二俵の八俵収穫したので、このときは麦の穂が出たとき、地面が見えない程でした。

失敗もありました。小麦では良くできたのですが、裸麦は穀（茎）が弱く、見事に穂は出たのですが、強い風が吹いたとたんに、一度は倒伏してしまい、収量が上がらなかったこともあります。このときは始めが良かっただけ、なおさらがっかりしたものでした。

現在、麦は作らなくなりましたが、当時は食料不足で貴重品でした。米も麦も一粒でも欲しい時期で、麦を輸入に頼っている現在では、このようなことは、とても考えられないことでしょう。

### 二、稲作

#### ―早場米の栽培―

米は今でいう早場米を他に先駆けて行い、普通十一月に採れる米を、九月始めに収穫したのです。これは道の西側の田で、現在光さんが、さつまいも

や大根を作っている場所です。このとき作った稲の品種は、農林一号といって大変おいしい品種で、現在の《こしひかり》の片親になっているほどです。黄金色に輝く見事な長い穂でした。

それが台風が来る前に収穫出来て、まさに現代の早場米作りを五十年前に行ったことになりました。水田の少ない東和町では、米はまさに貴重品ですし、今でもあの米のうまさは忘れられませんが、また他に先駆けて早場米を作ったのは自分だと、今も自負しています。

### 三、稲・麦・南瓜の三作

水田は表作に稲、裏作に麦というのが普通でしたが、麦を作るときに、うね間を広くして、南瓜を麦の間に植付け、稲を植えるまでに南瓜も収穫するという、大島郡では初めての方法（三毛作）を行いました。ここで採れた南瓜は、今の県議の柳居俊学さんの父の宏俊さんと一緒に、戦後で引揚者の多い沖家室に持って行き配った所、たいへん喜ばれた記憶があります。

### 四、米安晟の都会進出

#### ―郷土・半田の農業から離れた理由―

私の東京に出た理由は、宮本先生と若干異なります。戦後私はこの半田の農地と蜜柑畑で農業を行う積もりで始めました。その後、現在の普及員制度の前身である指導農場制度が、米軍の押しつけで始められ、この仕事をするよう、小積の藤山先生に勧められ、平野にあった指導農場に勤めながら、農業をしていました。

ところが、同級生の宮崎清二（当時東京在住）から、次のように言われたのです。

「大島郡では土地が狭いから、長男が家に残り後を継ぐのに、三男坊のお前がなんで残るのだ」と同級生であり、本人も次男でもあることから、率直な意見をたたきつけるように言われ、郷土の農業のために残ろうと考えていた私にはショックでした。

このことが、私が半田の田から離れ、東京にでる直接の理由で、渋沢先生と宮本先生のお骨折りで、東京農業大学三鷹農場で働くことになったのです。宮本先生のケースとは違い、狭い土地の大島郡に残ろうとして、残れなかったのです。

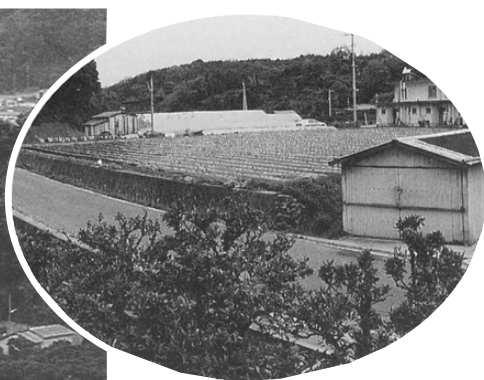
宮本先生の家で小作の形で、私の家の畑を作り、私は大島郡から離れた所で、小作していると思うこともあり、今は東京と東和町とで農業をしていることになりました。場所こそ違え私は畑仕事を五十年続けているのです。

## 半田の畑で展開された 宮本光さんの農業

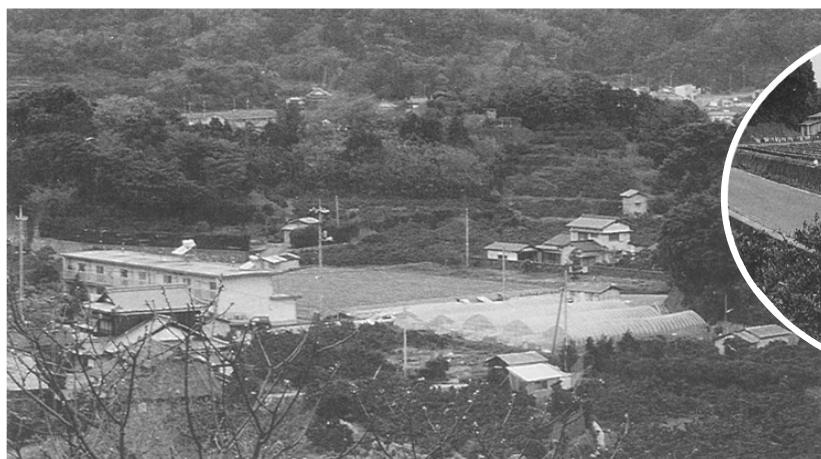
―石を入れることで苦労した宮本先生と、石を出すことに苦労した光さん―

宮本先生の次男の光さんが、東京農業大学を卒業して、大島郡で農業をやると言い出したときの先生の気持ちは、残念ながら直接は聞き漏らしましたが、昭和五十二年に、光さんは武蔵野美術

大学を卒業した、現在の奥さんである紀子さんとの結婚式を東京で挙げ、そのとき私も招かれ、披露宴で自ら、歌を歌い踊りを披露する宮本先生の姿を



◀▲現在の半田



見て、光さん夫妻が郷土で農業を営むことを、本当に喜んでおられたのだと、今も思っています。

宮本先生の家の農地は、蜜柑畑が多く家から離れているので、苗作り・野菜づくりには向きません。そこで東京で仕事をしている私は、光さんに半田の土地を自由に使うように話したので、光さんは正式に借りたということです。とで、東和町の農地委員会に申し出て、契約を交わし現在に至っています。

現在この道の側の一部を空けてもらって、私が野菜や花の見本園として昨年からは作っています。半田の土地利用はまさに時代の流れて変化してゆきます。

### 宮本先生は石ころを運んで 入れるのに苦労し、 宮本光さんは石を畑から出 すのに苦労する話

半田の土地は私が水田として利用した後、東京に出た間に埋め立てられて畑になりました。これは白木山に登る道を作る際に残土が多く出て捨てるのに水田の埋め立てということになったのでしよう。

ところが石ころの入っていない土は表面だけで、下層の土には石が沢山混じっていたのです。埋め立てた土が落ちて着くと共に、次第に表面に石が出て来て、鋤も作業機も使えなくなってしまうのです。

光さん・紀子さん夫婦は、宮本先生

が暗渠のために、石ころを入れるのに苦労したのに対し、石ころを畑から出すのに苦労したのです。（この石ころは半田の西側の畑のことで、宮本先生が手伝って暗渠排水した所は東側の畑です。から、畑から出したのは埋め立てに入っていた別の石ころで、道の西側の畑全体に混じっていたのです。）

この出された石は道路の側に山積みになれその量は膨大なもので、この労力はいへんだったと思います。このような苦労の後で機械も仕え、生産力の高い畑が生まれたのです。

石を入れるのに苦労した宮本先生と、反対に出すのに苦労した光さん、なんと皮肉な話でしょう。

### 水の話

― 湿田を乾田にする為に排水に苦労

した宮本善十郎・宮本常一

井戸を掘り灌水施設を整えて、畑

の生産力を高めた宮本光

かつての湿田が乾田となつて後、こんどは埋め立てられて畑となりました。そうすると今度は、水が必要になってくるのです。

特に育苗を行ったり、畑にさつまいもを植えたり、大根を播いたりしますと、水の有無・灌水装置の有無は、畑の生産を左右するのです。光さんは平成六年にボウリングを行い、水を確保し灌水できるようにしたのです。白木山から地下に浸透した水が、半田を湿田にしたり、現在は地下に流れる水を

汲み上げて灌水に利用する。

このように見ると簡単に郷土とか土とか、表現はしていますが、目に見えない長い歴史があり、この上にまた新しい歴史が積み上げられて行く、これが本当の郷土の歴史ではないでしょうか？

土は郷土にいつまでも存在しますが、何も語ってはくれません。しかし農業から離れて偉大な民俗学者となつた宮本先生、その出発点の一つが半田の田であり、農業に関係する仕事をする弟子の一人である米安晟、農業の仕事に就いた宮本光さんと、連なつて現在に至っているのです。私も光さんも、農業を嫌つた（実際は農業が好きで別の形で農業に貢献した宮本先生）こう考えると歴史の流れ、郷土の土に展開される流れという以上に、人の営みの深さを感じるのです。

### 記念事業と宮本常一

これから展開する宮本常一記念事業は、東和町の将来を見越しての事業でありたいと考えます。宮本先生の体験した、つらい農業から脱皮し、日本一といわれる高齢化した町、ここで活かされる仕事でありたいと考えます。

すでに立派な博物館相当施設も整い、運営されています。宮本先生が、出来なかつたことを東和町で実施し、将来さらに高齢化する社会での見本を作る、計画だけでなく、実行でき将来性のあるものになりたいと思います。

### 宮本常一・米安 晟・ 宮本 光の年譜

明治四〇年八月一日（一九〇七）

宮本常一、生まれる

大正一一年（一九二二）

宮本常一、小学校卒業

農業従事、暗渠排水手伝い

大正一二年（一九二三）

宮本常一、大阪にでる

米安 晟、生まれる

昭和一〇年二月（一九三五）

宮本常一、玉田アサ子と結婚

大阪在住

昭和二〇年（一九四五）

米安 晟、復員して帰郷農業と農業修行

米安 晟

昭和二四年（一九四九）

米安 晟、東京農業大学勤務

昭和二七年二月（一九五二）

宮本 光、誕生

昭和三八年（一九六三）

洪沢敬三、逝去

昭和五二年（一九七七）

宮本 光、結婚して東和町で農業を始める

宮本 光

昭和五五年（一九八〇）

宮本常一、郷土大学を作る

学 長 宮本常一

副学長 米安 晟

昭和五六年一〇月三〇日（一九八一）

宮本常一、逝去

平成一〇年三月（一九九八）

宮本常一の妻アサ子健在、農業に従事

# 島四国とおせつたい

一、大島八十八力所霊場のあらまし

四国八十八力所（本四国）は弘法大師にゆかりの深い寺をめぐる聖蹟巡礼の一つである。本四国巡礼は近世以後庶民に親しまれ、今日も団参バスを利用してさかんにおこなわれている。本四国巡礼は全長三六二里（約一四四〇キロ）と距離が長く、徒歩だと五〇日ほどかかる。

周防大島でも本四国巡礼や、伊予近辺の七力所参り、札所での接待にでかけた。さらに、本四国巡礼に行けない人のために、本四国をうつした大島八十八力所もつくる。一島を巡る島四国は瀬戸内地方で一番古い貞享三年（一六八四）開設の小豆島や、越智大島、神島、生口島、因島など数あつくある。

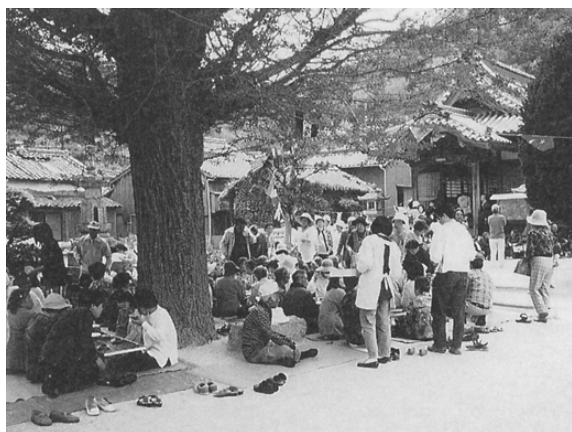
大島八十八力所は明治二十二年に大島町日見の真言宗西長寺の佐々木純円が「周南八十八力所霊場」を開設したのに始まる。大正九年には「大島新四国八十八力所霊場」と改称し、昭和十三年の開設五十周年記念の大法会の後に、「大島八十八力所霊場」となる。大島八十八力所は三八里六町（約一六三キロ）で、五、六日でまわれた。

大島八十八力所巡礼は春を中心に、島内外から多くの参拝者がおとずれ、無料で泊まれヤド（善根宿）も多かった。善根宿は四国八十八力所巡礼だけにみられる習俗で、越智大島では今も

続いている。ヤドをする家は村々で決まっていた。人を泊めるため家が広く、信心深い人がいる家である。巡礼が「おやどください」とヤドを尋ねてきたり、反対に巡礼に声をかけて泊めることもあった。

小伊保田の青山家は長くヤドをしたのでなじみの巡礼が多く、なじみの人はバスが開通後も泊まった。巡礼はヤドにつくとまずお杖を洗い、風呂に入り、食事の後はお経をあげ、世間話をした。母家の表側の八畳二間で、巡礼にやすんでもらった。翌日は朝仏壇を拜んで、お札を置いて出立した。米どころなので終戦直後でも御飯をふるまったという。

馬ヶ原は川口家のお祖母さんが信仰家で、二十五年ぐらいい前に亡くなるま



でヤドをした。一度に一〇人以上が泊まり、たくさん布団があった。お祖母さんは接待して友達になった家にヤドを頼み、大島八十八力所巡礼にでいたという。

周防大島では接待も盛んである。接待は三月二十一日の弘法大師入寂の日、盆月の七月二十一日、霜月（十一月）二十三、二十四日などに行われる。三月と七月の接待は弘法大師の供養のため、霜月は弘法大師が今も諸国を行脚してこの日来訪されるという信仰にもとずき小豆粥を炊いてもてなす意味がある。周防大島の接待は春だけで、東和町の旧油田村は新暦三月二十一日、旧和田村以西は旧暦三月二十一日で橘町と久賀町にまで及び、月遅れの四月二十一日は大島町が中心となる。周防大島は地域で日ごととなり、相互に接待をうけるのである。接待は現在でも、心のこもった交流の機会となっている。

周防大島では接待日以外にも春秋の彼岸などに付近の札所に参った。七力所参りの順拜路は地域で違い、小伊保田では和田から馬ヶ原、油宇、伊保田をまわった。地家室では弘法市に行くとき、船越、下田、長崎の札所を巡って七力所参りをしたという。

二月二日の弘法市も、四国八十八力所の寺院で三月二日に春市の立つところが多いことと関係がありそうである。盆月には大師の盆踊りがあり、弘法清水など弘法大師にちなむ伝説も残る。沖家室の峠ノ下の奥院弘法堂の海辺に、海岸道路が整備されるまで清

水が湧き出ていた。この清水には老婆から一杯の水を飲ませてもらった旅僧（弘法大師）が、お礼に波打際に水の出る場所を教えたという伝説があった。

現在、大師講や御詠歌講などの講が少なくなっているが、弘法大師への信仰は日常生活にとけこんでいる。ことに女性の場合は、日頃からお参りも熱心である。戦前まで娘は一度は大島八十八力所を巡ったものである。

## 二、東和町の札所

東和町内の札所のお堂は六畳二間に、奥が祭壇で弘法大師像などを祀り、祭壇の下は物置きになっていることが多い。

札所は寺院の境内や隣地に建つても、神社との関わりが伺い得ないのは、神仏分離後の近代に霊場が開設されたからであろう。札所のある寺院は禅宗の泉福寺・普龍寺・元正寺・正岩寺、浄土宗は神宮寺・浄西寺である。本四国でも真言宗以外に天台宗四・禅宗三・時宗一ヶ寺があり、大師信仰の宗派を越えた広がり柔軟性が札所からも伺える。

札所が集落内に建つ場合は、集落背後の見晴らしのよい高台が多い。集落の出入口など街道に沿って建つ辻堂形式のものはない。札所をきめる経緯はわからないが、すぐれた立地条件からみて開設以前からある堂を札所にするが多かったと予想される。

ただし、油宇の第七十一番薬師堂は霊場開設にあわせ、新設した札所であ

る。薬師堂は雨漏りなど痛みがひどくなり、管理者の浜本ミズエさんと世話人二〇人が中心になり平成三年に再建される。解体時に天井裏から棟札が見つかり、薬師堂が村内と家内安全を祈願して明治二十四年正月二十四日に浄西寺十九主神嘗呑海によって建立供養が行われたこと、敷地は浜本ミズエの曾祖父にあたる惣三郎が寄付し、堂の建設は三人の主任と世話人十二人が中心になったこと、本尊薬師如来もこのとき七人により寄進されたこと、大工棟梁は西村儀平であつたと記されていた。大島霊場の札所に書いてある本尊と、現実に祀られている本尊は一致しないことが多い。薬師堂で両者が一致するのは、開設時に新造したからである。

ちなみに、再建寄付は「大師堂改築世話人会」を作り、油宇自治会の一三区から一九区をつないで歩いた。世話人は外に出ている縁者や友人などのシリヒトに手紙などで寄付を頼み、伊保田の大師講にも呼びかけた。巡礼の人々にも奉加帳を置いて、寄付を頼んだ。大島霊場開設一〇〇を記念して大師堂が新築された例は多いが、いずれも寄付者は地下から郡内外にまでおよぶ。大師信仰の柔軟性と、外に出ることの多かった東和町の人々の交流の広がりがそこからは伺える。

また、大島霊場に途中で登録した場合もある。小伊保田の第六十八番奥之院に掛かる額には「大島郡油田村小伊保田・弘進堂・當島第六十八番霊場奥

之院・右台帳へ登録候也・昭和十年三月一日・大島八十八ヶ所根本道場・西長寺」とあり、もたらあつた堂を奥之院として新たに登録したときの証書である。コウシンドウとあるから、元は庚申堂だつたのであろうか。堂内には葬式に使う輿などをしまっており、寺のない小伊保田では葬祭にも関わつた堂だつたのかもしれない。

堂内の写真額に「支部発会式記念撮影・昭和八年廿五日写・高野山大師教会金剛流小伊保田」とあり、指導の僧侶を中心に男性二人、婦人六人、娘十一人が写る。娘の一人の青山房子さんは、十一、二歳のころ母親の松島ハルヨさんに連れられて参加した。現在の品川久雄家の場所です瓦屋をしていた山崎佐太郎家の二階で、泊まりがけできた僧侶からおつとめの方法と、本を見ながら御詠歌を習った。ただし、御詠歌講は長くは続かなかつた。馬ヶ原の第七十三番札所にも、昭和七年に安下庄の御詠歌講に加わって支部として活発に活動し、賞状を貰ったときの記念写真が残る。男性三人、女性十七人が写り、安下庄の谷晃次さんが泊まりこみで指導したという。

昭和九年は弘法大師入定千百年忌で、全国で前後には様々な記念行事が行われた。それが御詠歌の布教と講の隆盛、小伊保田の奥之院の設置にも影響したのである。

### 三、おせつたいを歩く

旧白木村の接待は旧暦三月二十一日

で、一九九七年は四月二十七日になる。大安と日曜日が重なり、晴天にも恵まれ、お参りの巡礼は例年にくらべ多かったという。

大師の供養のために餅・おむすび（ササゲの豆御飯と混御飯）などが供えられ、巡礼にも接待される。調理するのはベテランで、弘法大師と同じものを食べるのだから美味しく感じるはずである。接待は弘法大師と共に様々な人と食物に出会える、遊び日なのである。

### 。餅の伊崎

伊崎の第八十五番薬師堂では七時から、大師講の三人の婦人が大師堂と並ぶ薬師堂で餅の接待をはじめ。昨日の準備のときは違い、三人とも真新しい日本手拭いで髪を包み、白い割烹着を身につけ、あらたまつた心構え



が感じられる。

接待が七時前から始まるのは、親戚のある油良の接待に早朝のバスで出かける人がいるからである。自家用車を利用することが多くなったが、バスが到着すると接待が忙しくなる。バスの本数は少ないが、今でもお年寄にはかせない交通手段である。お参りにきたお年寄りから「車でないとうまいらんの」と、友達の娘の車に便乗させてもらったことへの感謝の話も聞かれた。

七時をすぎると、伊崎の人がぼつぼつお参りに来る。なかには畑にそのまま向かう人もいる。ただし、伊崎に学生や勤め人がいた頃は、通学通勤前に参つたので今より朝は早かつた。今は老人ばかりなので、以前より出足は遅いのだとい。

お参りの人に「お茶を飲んでかえりんさい」と声をかけ、お茶と漬物をすすめる。お茶を飲む間に「お母さんどうね」と健康や、「長かつたのに髪を短うしてしもるたんじゃねえ」と身のまわり、島外に出ている子供のことなど、互いの近況についての世間話がはずむ。帰り際には「お接待もうつていって」と、餡入りに白餅と草餅をビニール袋に入れてわたす。お参りした人の分だけでなく、「旦那さんにあげてください。よう、魚が釣れるように。」と家族の人数の餅をわたす。

昨年、町外からの参拝者に「このあたりは畑が多いが、野菜はたくさんつくつとるんかね」と聞かれたのがきつ

かけになり、毎週その人が野菜の買いつけにくるようになった。楽しみでつくってはいても、現金収入にならなかつた野菜が、わずかでも換金できるようになる。以来、人に負けないよい作物をつくらうという意欲が出て、みんなが生き生きしてきたという。

### ○佐連のおにぎり

佐連の第八十番地藏堂での接待の準備は、朝八時半ごろから佐連会館で混御飯のおむすびをつくる。五斗炊きの釜でご飯を炊き、ヒジキ、切り干し大根、人参、椎茸などを煮た具をまぜ、婦人六人が待ち構える中央のおひつに移す。二人が水をつけたしゃもじで茶碗に混ぜご飯をいれ、ビニール袋を被せた四人の手に手際よく移してゆく。おにぎりはモロブタに並べ、モロブタからおにぎり二つと漬物を、また別の婦人がプラスチック容器に移す。昨年までのビニール袋から、今年はプラスチック容器の接待があり変わった。

橘町長浜からきた家族連れは、毎年船越から地家室、佐連、沖家室、大積、平野の薬師堂の巡礼を続けている。佐連のおむすびは何時もおいしいと楽しみで、車のなかで温かいうちに食べた。長浜は新暦の四月二十一日が接待で、戸数が約二〇戸と少ないため、三日がかりの接待だという。相互の接待も、集落規模が小さいと大変である。

今年の接待は日曜日なので米を例年より五キロ増やして七〇キロ炊いた。公民館では休む間もなく五升炊きの電

気釜が湯気をふきあげ、二時頃まで炊いては握る作業が続くという。女性たちは忙しくはあるが、慣れたもので余裕がある。経験豊かな人が自然と采配を振り、それに従って経験をつむと、「目量り」で味がぴたつときまるようになる。いつのまにか、采配を振る人になっている。

説教所内の地藏堂では二人の婦人がお茶などの準備をする。九時ごろおむすびがとどくと、説教所内の弘法大師、続いて奥之院に供える。接待の用意が出来ると、集落内に放送して知らせる。「マイクかかるから、佐連からいっぱいくる」という予告どおり、しばらくすると細い路地を連れ立って、お参りにくる人が続いた。

お参りしたあと、「お接待いただきにまいました」というと、接待の婦人



が「あんた、おとうさんあつたかね」とか、「一つでよござんすか」と接待の数がまちがいないか念をおす。「ぬくいうちに仏さんにあげなさい」と、近年主人を亡くした婦人へのいたわりの言葉もあつた。足が悪くて来れない人も多く、預かる人もいる。最後に「おつかれさまでした」と接待の人への、ねぎらいの声をかけて帰る。

### ○島の粥

沖家室は三力所で接待がある。須崎の観音堂、泊清寺境内、両集落の中間にある峠ノ下の弘法堂である。札所ではないが観音堂と泊清寺は粥の接待で、島内外に知られている。観音堂では堂の前と横に箆を敷き、テーブルを置いて粥を接待する。豆茶を煮だした粥のなかに、お多福豆（ソラマメ）とウズラマメが入っている。おかずは、たくわんと高菜漬けを千切りにして、ゴマをかけたものがでる。数十人がひしめて座り、粥を入れるのにステンレス鍋では足りず、新しバケツを利用する。

観音堂の中では寄付の受け一人と、地元須崎の女のお年寄りが御詠歌をあげる。調理場は観音堂と隣の小屋との間にある。小屋には長年観音堂の世話をしてきた胡崎シゲさん（九四歳）が座り、漬物などの差配をする。シゲさんの娘さんが、粥つくりの中心になっている。堂の周辺に茶碗などの食器を洗う人が三人、運ぶ人が二人、みないそがしいそである。観音堂は高台に

建ち家室橋が目の前に見え、展望も申しぶんない。

本浦の泊清寺背後の弘法堂は山腹に建っている。弘法堂前に休息所があり、集落やエビス神社など見通しがよい。堂には二、三人の婦人が詰め、寄付の受けと子供にだけ菓子接待する。須崎同様、寄付は半紙に書いて、堂内に渡した紐にはりだす。

堂から物見山への緩れ折りの坂道にも八十八力所の石仏が尾根まで並ぶ。尾根には七、八坪の広場があり、中央に大師石仏を祀る。古くはここで粥の接待をした。粥を炊くのに大師堂前の湧き水と、足らない時は下の寺から水を運びあげた。大変だからと大師堂の前の広場におり、今は泊清寺境内に移る。

御詠歌のテーブルがながれる泊清寺境内の大イチョウの回りの箆の上に、八人用テーブルが八つ並ぶ。テーブル周りは常に人がいっぱいで、昼時には本堂の中や縁側で粥を食べる人もいる。粥は寺と通りを挟んだ向かいの家でつく。粥を炊く大鍋を据えた竈の横の壁に、木炭で何回炊いたかを数える「正」の字が見える。二時半ごろには十九回を数えていた。さらに、老人給食をつくる所でも補いに炊いているという。それでも途中で粥が足らなくなり、出来るのを待つこともある。朝には竹の子やフキの煮物なども井に盛ってあったが、昼前にはすでにない。接待を手伝う家から持ちよる、高菜や瓜の漬物はどれもつまみ。「自分の家でつ

くると、ぜんぜんちがう」と度々聞いた。一人でできていた高齢の女性は、粥三杯をペロット食べた。高齢者は一人で暮らしが多く、一人で食事をすることも多い。伝統的な粥を、わいわい食べることは、ことさら美味なはずである。

沖家室では近年巡礼が増え、粥を炊く量も多くしている。この年の人出は予想をこえ、須崎では十二時半ごろには食べ終わり、接待した人は食べられなかったという。

#### 四、お世話たいを支える人々

##### ○小伊保田の移りかわり

小伊保田では御詠歌講の人達を中心に大師講があった。十軒ほどが加入し、毎月講員の家を交代で宿にして、おつとめのあと食事をした。戦後、御馳走をつくるのが忙しいからと、大師講は廃止になる。当番宿をまわっていた大師像も、大師堂に預ける。大師講が中心になっていた大師堂の世話や接待は、講がなくなってから米を持ちよりヒラナベで炊いて続けた。それが、三四人と有志の人数が減り、昭和五十七年十一月から大師堂の月当番をきめ、部落で世話と接待をするようにした。

大師堂の月当番は小伊保田を西から東へと家並び順にまわる。月当番は月に三回掃除とお供えをして、花を新しくして次の当番におくる。高齢者でも班のみんなが手伝い、月当番とはばさない。家数が少ないのでとばすとすぐ当番がまわるからである。三月の月当

番が接待（御大師祭り）の当番になり、当番の所属する班が手伝う。部落で接待するようになり、各家から米二合をつないでまわるようにした。つなぐのと混御飯と豆御飯のおむすびは班の女性の仕事で、米は一斗五升炊く。米の不足分、豆などの食材、お供えは当番が負担する。当番に自治会からお供え代の助成がある。班の婦人が公民館で朝六時から昼ごろまでつくったおむすびを、当番が堂でみてる（無くなる）まで接待する。接待が終わると供えた餅などは班の人と分け、お参りにこれなかった家に当番がおむすびをとどける。お年寄りの多い東和町では、お参りの有無や時間は天気に左右される。雨が降ると参れなかったり、朝など肌寒いと参るのが遅れたりする。参らない人には接待を届けるが、配り残しがないか当番は心配する。

##### ○大師講

小伊保田では大師堂の世話や接待は、大師講から有志へ、さらには組や家が交代しながら地域全体でするようになっている。全体の流れは小伊保田に近いが、東和町内だけで地域により様でない。

今も大師講が、伊保田の第六十九番阿弥陀堂では年間を通して世話し、接待する。講員は現在十七軒で三区から一〇区までの伊保田全域に広がり、浄光寺・浄専寺・深広寺などと浄土真宗と浄土宗檀家が混ざる。三月の接待と六月の弘法大師の誕生会は親睦会を兼

ね、全員参加でおこなう。その他の月の大師堂の掃除やお供えの世話は月当番があたり、基本的には二人、九・十一・十二月は一人である。

三月二十日は七、八人が集まり昼の一時半からお経と御詠歌でおつとめがあり、接待の準備をする。二十一日は朝から準備をはじめ、午後三時ごろまで接待する。

伊保田大師堂も大師講が中心で、講員六人の宗派はさまざまである。以前この堂が東（三区）の墓地付近にあった関係で、今も講員は三区に多い。講員二人づつが月当番になり、月の一・十・二十一日の三日お世話をする。一日と十日は花をかえ、二十一日には全員が寄つて二時からおつとめする。おつとめと接待には、堂のある七区の婦人が加わり、講員をあわせ十人から十二人ぐらい集まる。

また、同じ大師講でも札所の世話や接待を特にしない場合もある。佐連の大師講は以前は全戸が加入で、一年に一回宿がまわるよう十二軒を目安に多数あった。佐連でも大師講は宗派・血族・地縁によらずばらばらである。戦前には大師講の宿などが各個で接待したというが、村内だけで他所からくることはなかった。また、大師堂の世話や接待とは関係がなく、札所での接待は戦後婦人の有志がはじめた。ただし、戦前には餅について伊予まで接待にくく男性の接待講はあった。今も二つ大師講のこのころが、世話や接待に直接関係しない。そして、大師講で祀ってい



た四つの小大師像が、粗末にならないよう奥之院に預けられている。なお、小泊・佐連・伊保田では個人で大師を祀り接待した例もあり、小伊保田の奥之院の小大師像の一つも個人で祀っていたものである。

##### ○世話人と有志

油宇の第七十一番薬師堂は敷地を寄付した浜本家が堂の世話と接待を続けていた。現在は浜本ミズエさんの娘の石川チエコさんが堂の世話と接待を続け、接待には広島県から毎年接待に帰ってくる森下ヤスノさんと二人が堂につめる。饅頭とお菓子をお参りの人に声をかけながら接待する。以前は地元信者がおむすびを接待のために持ち寄ってくれ、今は接待費を寄付してくれ



る。

### ○村組と当番

組と班といった村組を単位とするが、札所の世話と接待の役をわけるとなると細かい違いがある。

雨振は第六十九番観音堂の世話係としての月番が、東から西に家並び順にまわる。月番は毎日「オッパン」（仏飯）をあげるが、雨など事情のあるときは家で供えてすませることもある。接待をうけもつ当屋はカワラ（川）を境に雨振の西と東が毎年交代していた。それが、西の戸数の減少がはげしく、新たに両源田に西と一緒になつてもらった。当屋は前日から雨振会館で五、六人が接待のおむすびの準備をし、堂にも二人がつめる。

日向泊の大師堂も月当番と当屋がいるが、戸数がすくなく年に二回月当番がまわることが多いという。

馬ヶ原は東・中・西の三組から一人づつ、三人がえらばれ三年間当番になる。日常の世話は一人が一年間おこなうが、接待は三人が協力する。三人いると何かおこったとき、安心でもある。三年前まではおむすびを接待し、当番が米をつないで準備した。今回の当番からパンにかえ、お金をつないで歩くようになった。金額は最低だけを決めている。

### ○御詠歌講による再興

油宇浄西寺境内の大師堂の接待は休んでいたが、一九九八年から再開した。浄西寺には浄土系の御詠歌講があり、毎月寺で練習している。近年楼門を新築して薬師仏を祀つたのを契機に、御詠歌講の高齢者五人ほどが金剛流の御詠歌を毎月あげるようになる。高齢者は大島八十八力所を巡り、金剛流の御詠歌を知っていた。その一五人を中心に、御詠歌講仲間が援助して、モブリゴハン（混御飯）と豆御飯のおむすびをつくり接待した。

### 五、札所を巡る人々

接待をうけにまわる人々は、子供連れの家族や女性グループが多い。昼弁当付きのハイキングといった気楽さである。新暦だと墓参りに帰省してきた家族連れも多い。女性グループは般若心経をあげる人が多く、堂の前で手に携

帯用の木魚を持参する人もいる。堂にあがってあげるのは、地元の人に限られる。大島八十八力所には年間を通して、どこから、どのくらい巡礼がお参りにくるのだろうか。それを知る手掛かりに、札所に納めたお札がある。ただし、お札は近くをまわる時は納めず、東和町内など近くの信者の動向は知りえない短所はある。

さて、東和町のお札については「地家室だより」十八号で石風呂大師堂の一年間のお札について分析した先駆的な業績がある。地家室は四力所で接待があり、その一つ第八十二番札所石風呂大師堂は郷組が世話する。石風呂大師堂では最近まで餅米を二斗六升もついで餅を接待していたが、人手がなくなり今はパンとお茶に変わった。大師堂の下方の道路に駐車しやすく、堂までの沢沿いの道も景色がよく、今もお参りの多い札所である。

昭和五十九年四月から六十年三月までに納札された一四七七枚を、月別順拝人数・年齢別順拝人数・住所別順拝人数の三項目から男女別に分析している。

月別順拝人数については月日を記入した七〇九人の内、二月から五月にかけての春が多い。なかでも三月が一五〇人、四月は二六九人と多く、四月の順拝者が四割をしめる。ちなみに男女比は一一三八人对二六二人で、女性が倍近い人数となっている。

年齢別順拝人数は記載があるのは四一四人で、三才から九三才までである。

年齢が上がるにしたがって増え、六〇才から六九才までが一五人で一番多く、次が七〇才から七九才までで、あわせると全体の五五パーセントをしめる。男女比は若年層はほぼ同数で、二〇才から二九才までは男性が多い。

住所別順拝人数は住所を記載した四七一の内、郡内が三五九人と四分の三をしめる。郡外他県内が八四人、他県（東京・福岡・愛媛など二都府県）が二八人で、郡内を中心とするが広範な広がりが見られる。

地家室の調査から十年を経て、橋の無料化など社会状況は変化したが、そこで今回、十年後の変化を調べるため、近くの佐連の札所のお札を調査した。ただし、佐連では毎年盆踊りでお札を供養して焼くため、一年間を通して比較できない。そこで、地家室で触れていなかったお札の形態や願文から、巡礼の祈願について考えた。

全て紙札で、大半は白紙である。納札箱にはお札に混ざって、般若心経などの写経を納めた人もある。順拝回数を重ねて初めて使用できる赤紙・金紙のお札も若干まざる。お札の文字は印刷したもので、上方に弘法大師の絵像、左右に「天下泰平・家内安全」、絵像の下中央に「奉納八十八力所霊場順拝同行二人」、左に奉納の「年月日」、右に「住所・氏名」とあり、奉納者が記入する余白がある。右に「年月日」と「住所（県・郡市・町村）」、左に「願意・氏名・才」と印刷したお札もある。半紙を切った手書きのお札は少ない。

お札の裏に住所氏名のゴム印を押した札もある。順拝を数十回もした人は本尊さまが顔を覚えているので、無地の金紙や銀紙を納めればよいともいう。赤紙の一つに、「平成十年三月吉日・奉納四国八十八力所順拝同行二人・山口県熊毛郡上関町室津・花谷百江」と住所氏名まで印刷したものがある。年は赤紙を切り貼りしており、上から「十」と書き、四国巡礼で使ったお札を転用している。他の札所の転用とわかるものには「周防観音霊場南無大慈大悲観音菩薩」「奉納小豆島八十八力所同行二人」があり、小豆島の札の願文には「天下泰平」「五穀成就」と豊穰が祈願されている。

複数のお札をホツキスや糊でとめて納めたものもある。同じ筆跡が多く、家族や縁者の分もあわせ納めたのである。また同一人が同名で複数枚納札した例がある。三枚納札した男性は、お札の裏に「年末ジャンボ宝くじが当たりますように 一等」とある。二枚に「家族身体健全」と書いた女性もいる。印刷した文字と同じ「家内安全」と重て書いたお札もある。数を増すことで願いの切実さを示そうとしたのである。

手書きの願文で一枚に、「当病平癒」「交通安全」「安産」「身体健全」と四つ記したものがあつた。また、具体的な病気の平癒を願うお札には「女」とだけある。いずれにせよ健康に関する願いが一番多く、交通事故がそれに続く。家族の健康と交通事故が最大の願いと



いうことになる。結婚と合格祈願は本人と母親が願っている。

全体に現世利益を願っており、先祖供養がわずかに二例と少ないのは、現代の世相を物語ると同時に、弘法大師はそれほど身近な信仰対象なのである。

東和町の一部では赤色や金色のお札を、子授けや病氣治療の呪物として用いることがある。赤色は子授けに、金色は病氣に切つてのんだり、財布にいれると御利益があるなどである。ただし、東和町でもお年寄りには、以前はそのような信仰はなかったという。昭和五〇年ごろからバスによる本四国巡礼に、東和町からも参加するようになる。本四国巡礼にいったとき、色紙のお札の御利益を教えられたという。世相とともに、お札の習俗や願いも変化しているのである。

平成10年度

## 必須アミノ酸研究委員会夏季シンポジウム 及び「疾病予防と栄養」の講演会の開催について

平成一〇年八月五日東和町片添サンシャインサザンセトにおいて、必須アミノ酸研究委員会夏季シンポジウムが開催されます。この学会は第二次世界大戦後食料の供給事情がやや良くなった昭和三十四年に、食事の質を向上しなければ十分ではないとの考えから、全国の大学・研究所の研究者が集まって結成し今日に至ったものであります。食事のうち、タンパク質は最も大事な栄養素で、その必要量や働きを研究するのが目的の学会であります。年に四回研究発表会と、夏季に全国各地でシンポジウムを開いております。今年は本町出身の東京農大舩重正一教授を当番役として東和町で開催することになったものであります。地域の活性化は特産物の創出と育成・頒布も重要であります。文化の創出と発信も大切なことです。その意味で東和町には十分な受け入れ体制があることを知ってもらおうのも一つの目的であります。今回の課題は「真核生物におけるタンパク質代謝調節研究の現状」と難しいものであります。遺伝子の先端的研究者の研究発表会です。現在第一線で活躍されている先生方が研究発表します。折角の機会ですので前日の皆様のための講演会を計画しています。今のところは次の先生方を予定しています。

- 。野口 忠（東京大学教授）
- 。栄養と食糧に関する話題
- 。渡辺 昌（前ガンセンター部長、東京農大教授）
- 。癌の予防と食事
- 。五島孜朗（東京農大名誉教授）
- 。カルシウムの栄養と骨粗鬆症
- 。舩重正一（東京農大教授）
- 。ビタミンの話

# 自助努力し地方回帰を



記念事業推進部会長

新山 玄雄

## 町人会

秋たけなわの十月十九日、日曜日の正午から、東京東和町人会が「はあといいん乃木坂」で開かれた。

関東周辺の町出身者百余人の参加者があり、大変盛況だった。懐かしい顔と顔、話も大いに弾んで歌も飛び出した。やはり、いつになっても同郷人はなつかしく、いいものだ。

そして話は、古里の現況と将来におよぶ。どうしたらもっと古里に人が帰り、定住していけるのか。そんな古里への思いに熱くなる。いつも思うことだが、この会に参加した一割でも古里に帰ってくれば、大いに町の活力となるのだが…。

今、各町村でこのような会が盛んに

開かれている。それだけ地方から都市へ多くの人々が移動したということだ。

わが町は、その典型ともいえる。高齢化率日本一の町は、古里をあとにし、都会へ流出した人口の比率も日本一ということになるのだろう。多くの人材が、戦前はハワイ、台湾、朝鮮などの海外へ出かけ、戦後は全国各地へと雄飛していったのである。

それは、まさに幕末、長州の勤王僧といわれた月性が詠（よ）んだ「男子志を立てて郷関を出づ…人間到（いた）る処（ところ）青山あり」の世界である。

私たちの先輩は、この詩に鼓舞され、この郷関をあとにした。それが多くの長州、山口県の有為な青年たちの思いであつたろう。そして、その志は、わが国に大いなる発展をもたらす原動力になった。

戦後になり、高度成長期を迎えたころには、国家の政策として人口移動が加速され、過密、過疎といった問題が顕著となった。

その構図は、中央は地方から人材とエネルギーを吸収することによって、ますます増大していき、地方はその見返りというように中央から地方交付税、

補助金をもらい、公共事業や農業保護、福祉などに充当し、バランスを取るといったものだった。

そのシステムは、経済を高度成長させる上で、ある時期までは大変うまく作動していた。そして現在、ほころびが目立つようになったが、いわゆる「経済大国」といわれるようになっていく。

しかし、そのシステムはいつしか地方自治精神を消滅させ、自助努力の死滅、地場産業と小中企業の否定ということにつながり、家庭や地域社会の崩壊の原因ともなっている。

そのことにやっと今、多くの人が気づき始めている。このままでは、日本はますます沈滞し、やがては沈没してしまいうだろう。これは私たちを真に幸福にするシステムとは違う。

これからは、経済優先主義のシステムではなく、一人一人が幸福になるというシステム、世の中をつくっていくかねばならない。だから今、地方分権や規制緩和など、政治、行政、財政のドラスチック（徹底的）な改革が求められている。今やそれは、待ったなしの課題である。それらの改革も中央主導

ではなく、中央、地方ともどもにその役割を果たし、解決すべきことだろう。

これからの日本のエネルギーの方向は、地方にこそもっと向けられるべきだと思う。日本のフロンティアをどこにするか議論が始まっているようだが、それは多くの人が離れていった、離れざるを得なかった地方にこそあると思う。

そこで大切なのは自主性である。地域はそこに住む人々が、自らつくっていかない限り、本当に良くなることはありえない。

平成の月性なら、おそらくこう詠むに違いない。

「男子志を立てて郷関に還（かえ）る」と。もちろん男子だけではなく女子も同様である。

いざかえりなん、田園まさにあれなんとす。

（この文章は、十一月九日朝日新聞に掲載されたものです。）

